

2021 年度広島大学日本語教育学プログラム言語・文化・教育研究会

◎第 28 回大会（2021 年 11 月 11 日）

【講演】

日本語教育にタスク・ベースの言語指導（TBLT）の考え方をどう取り入れるか

—地域日本語教室や大学での実践を例に—

小口 悠紀子先生

【口頭発表】

① 曾 琴（博士課程後期 2 年）

中日の年中行事を取り入れた CLIL「日本状況」プログラムの可能性

② 道法 愛（博士課程後期 1 年）

シナイの「未完了」における「期待」についての考察

【ポスター発表】

① 鮑 小磊（博士課程後期 2 年）

敬語意識について

② 王 效琰（博士課程前期 2 年）

日本語学習者の文章聴解におけるメモ行為の効果 —メモ行為の機能の観点から—

③ 黄 楚璇（博士課程前期 2 年）

中国人日本語学習者における終助詞「ね」「よ」の使用状況について—中国語の語気助詞との対照から—

④ BOONSERM Sirada（博士課程後期 3 年）

シープラパー『絵の裏』における「日本らしさ」の演出 —タイ文学に見る日本表象—

⑤ 印 曉旭（博士課程前期 2 年）

日本語と中国語の事象の捉え方について—中国語の「V 了+数量フレーズ」と日本語との対照に着目して—

⑥ 丁 煜沁（博士課程前期 2 年）

日中両言語の可能表現の対照研究

⑦ 趙 鵬群（博士課程前期 2 年）

日中接触場面と日本語母語場面における話題選択と話題導入プロセスに関する考察

—初対面から継続会話の分析—

⑧ 于 款（博士課程前期 2 年）

中国人日本語学習者の謝罪ストラテジーの使用に関する研究

2021 年度（令和 3 年度） 日本語教育学プログラム 歳時記

2021 年（令和 3 年）

4 月 3 日	入学式（オンライン開催）
5 日	学部生新入生ガイダンス
6 日	大学院新入生ガイダンス 在学生ガイダンス（～7 日）
17 日	新入生オリエンテーション
7 月 20 日	2021 年（令和 3 年）度卒業論文中間発表会
8 月 5 日	2021 年（令和 3 年）度修士論文中間発表会
16 日～19 日	桜井千穂先生（大阪大学・講師）、集中講義—「年少者日本語教育特講」
18 日～21 日	オープンキャンパス（オンライン個別相談会）
23 日～27 日（25 日を除く）	金愛蘭先生（日本大学・准教授）、集中講義—「日本語の語彙と意味」
9 月 3 日～5 日	中山俊秀先生（東京外国語大学・教授）、集中講義—「言語学の理論と方法」
8 日～9 日	大学院教育学研究科入学試験 博士課程前期（一般選抜・社会人特別選抜）
10 月 1 日	新入生後期ガイダンス（学部・大学院） 在学生前期ガイダンス（2 年生～過年度生）
4 日～11 月 30 日	西原大輔先生（東京外国語大学・教授）、 集中講義（3 ターム期間中オンデマンド）—「日本近代文学特講」
14～16 日	根川幸男先生（国際日本文化研究センター・プロジェクト研究員）、 集中講義—「日本文化研究」
11 月 5 日	第 27 回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育研究会
19～20 日	A0 選抜（総合評価方式・フェニックス方式）
12 月 1 日～2 月 8 日	西原大輔先生（東京外国語大学・教授）、 集中講義（4 ターム期間中オンデマンド）—「近代日本文学史」 「日本近代文学演習」
25 日～29 日	桜井千穂先生（大阪大学・講師）、集中講義—「年少者日本語教育」

2022 年（令和 4 年）

1 月 12 日	就職セミナー 講師：川野龍命先生（Minori education（ベトナム）・日本語教師） —「ベトナムでの日本語教師生活」
31 日～2 月 13 日	加藤重広先生（北海道大学・教授）、集中講義—「言語の比較と対照研究」
2 月 1 日～4 日	桜井千穂先生（大阪大学・講師）、集中講義—「年少者日本語教育演習」
2 月 9 日～10 日	大学院教育学研究科入学試験 博士課程前期

(一般選抜第二次・社会人特別選抜第二次・外国人留学生特別選抜)
博士課程後期

(一般選抜・社会人特別選抜・外国人留学生特別選抜)

- 15 日～18 日 小河原義朗先生（東北大学・教授）、集中講義—「日本語の音声と発音」
- 14 日 2021 年（令和 3 年）修士論文審査会
- 15 日 2021 年（令和 3 年）卒業論文最終発表会
- 25 日 学部一般入試（前期日程）
- 3 月 11 日 広島大学大学院人間社会科学研究科設立記念セミナー
「日本語教育海外実習の新展開」
- ・全体司会・進行：中山 亜紀子（広島大学日本語教育学プログラム）
 - ・話題提供：
 1. 広島大学での日本語教員養成と海外実習
永田良太・渡部倫子（広島大学日本語教育学プログラム）
 2. 受け入れ先の協定校から見た海外実習
柳沢滴先生（タマサート大学・講師）
範玉梅先生（北京科技大学・准教授）
 - ・全体ディスカッション：
徐愛紅先生（中山大学・准教授）
Agus Budi Cahyono 先生（ブラウイジャヤ大学・講師）
- 23 日 学位記授与式

日本語教育学プログラム 教職員名簿

2021 年度（令和 3 年）

プログラム長 永田 良太

教 授 白川 博之 永田 良太 仁科 陽江 畑佐由紀子 松見 法男
柳澤 浩哉 渡部 倫子

准 教 授 小口悠紀子 中山亜紀子 西村 大志

事務補佐員 山田 典子

教育研究補助職員 李 在鉉

客員教員授業科目

<学部>

「近代日本文学史」	西原大輔先生（東京外国語大学・教授）
「言語の比較と対照研究」	加藤重広先生（北海道大学・教授）
「言語学の理論と方法」	中山俊秀先生（東京外国語大学・教授）
「日本語の音声と発音」	小河原義朗先生（東北大学・教授）
「日本語の語彙と意味」	金愛蘭先生（日本大学・准教授）
「日本文化研究」	根川幸男先生（国際日本文化研究センター・プロジェクト研究員）
「年少者日本語教育」	櫻井千穂先生（大阪大学・講師）

<大学院>

「日本近代文学演習」	西原大輔先生（東京外国語大学・教授）
「日本近代文学特講」	西原大輔先生（東京外国語大学・教授）
「年少者日本語教育演習」	櫻井千穂先生（大阪大学・講師）
「年少者日本語教育特講」	櫻井千穂先生（大阪大学・講師）

2021 年度（令和 3 年度）論文題目一覧 （学籍番号順）

博士論文（2021 年度）

氏名	指導教員 (主査)	称号	論文題目
三好 千聖	畑佐 由紀子	博士（教育学）	中上級日本語学習者の Academic Speaking の特徴 —論証に着目して—
馮 文彦	柳澤 裕哉	博士（教育学）	優位性の観点から見る「マア」 —出現条件と音声的特徴に着目して—
王 詩凝	永田 良太	博士（教育学）	課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の連鎖構築 —日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を対象に—
林 韻	松見 法男	博士（教育学）	日本語学習者の文章聴解時の 空間的状況モデルの構築における視空間作動記憶の働き —二重課題法を用いた実験的検討—
毛 炫琇	松見 法男	博士（教育学）	中国人上級日本語学習者におけるリピーティングのメカニズム —作動記憶容量の観点から—

修士論文（2021 年度）

氏名	指導教員 (主査)	論文題目
劉 璐	畑佐 由紀子	テレコラボレーションと E タンデム学習における中国人日本語学習者の発話の分析
董 思航	永田 良太	感謝場面における日中の言語表現の差異 —感謝表現と謝罪表現の併用を中心として—
王 效琰	松見 法男	日本語学習者の文章聴解におけるメモ行為の効果 —メモ行為の機能の観点から—
趙 鵬群	永田 良太	日中接触場面と日本語母語場面における話題選択と話題導入プロセスに関する考察 —初対面からの継続会話の分析—
安宅 純子	松見 法男	非漢字圏初級日本語学習者の漢字学習における形態・音韻・意味の連合記憶
于 款	永田 良太	中国人日本語学習者の謝罪談話に関する研究 —負荷の高低に着目して—
洪 丞昱	渡部 倫子	中上級日本語学習者のセルフ・エフィカシーがタスク遂行時の発話に与える影響 —タスクタイプの違いに着目して—
黄 楚璇	白川 博之	中国人日本語学習者における終助詞「ね」「よ」の使用状況について —中国語の語気助詞との対照から—
丁 煜沁	仁科 陽江	中国人日本語学習者の日本語の可能表現における誤用が生じる理由に関する —考察 —日中両言語の可能表現の対照から—
劉 佳玉	柳澤 浩哉	文体論を応用した会話スタイルの分析 —合意形成会話を例に—
印 曉旭	仁科 陽江	日本語と中国語の事象の捉え方について —中国語の「V 了+数量フレーズ」と日本語との対照に着目して—
潘 陽皓	永田 良太	接触場面における学習者の「共話」についての考察 —先行発話に着目して—

卒業論文（2021 年度）

氏名	指導教員	論文題目
椎木 陽太	永田 良太	フィクション作品における「悪役のセリフ」にみられる役割語の特徴
三浦 夏美	永田 良太	日本語学習者における役割語の理解
安原 伸哉	渡部 倫子	日本人大学院生と中国人大学院生のレポートに対する日本語母語話者教師の評価活動
田邊 奈緒	中山 亜紀子	日本留学における同国人コミュニティの意義 —中国地方在住のミャンマー人を例に—
杉本 彩楓理	中山 亜紀子	日本語作家温又柔の生きづらさはどこからくるのか
森 瑞希	中山 亜紀子	なぜ教室外の日本語学習を選んだのか —日本で働く人の事例から—
古財 怜旺	柳澤 浩哉	親しい友人から深い自己開示を引き出す発話展開の型
濱野 瑛史	中山 亜紀子	教師の視点から考える外国人児童生徒教育
福重 明日香	永田 良太	高等学校国語教科書の小説教材における女性像の比較
藤原 悠花	永田 良太	ファッション誌におけるオノマトペ —スタイリングアプリと比較して—
川崎 安純	永田 良太	家族間の LINE コミュニケーションに見られる特徴
田中 果南	中山 亜紀子	韓国メディアを通しての自文化理解 —日本人大学生への M-GTA 分析から—
齊藤 妙奈	渡部 倫子	CLD 児童生徒を対象とした学習語彙指導の試み —コロケーションクイズを用いて—
田中 舞友樹	中山 亜紀子	オンラインゲームを利用した日本語習得の可能性 —FF シリーズを通じて日本語を学んだシンガポール人女性のライフストーリーから—
原 萌霞	永田 良太	ビデオ通話を用いた雑談場面における発話の重なり
澤田 彩佳	渡部 倫子	電子端末を利用した読み聞かせが JSL 生徒の読解に与える影響
内田 生吹	柳澤 浩哉	洋画のセリフに込められた意味や工夫と日本語字幕で抜け落ちる情報の分析 —映画『YESMAN』を事例に—
檢校 由太朗	松見 法男	文字の非流暢性が日本語学習者の単語記憶に与える影響
山田 はるか	松見 法男	日本語学習者の日本語文の聴解における方言知識の影響について
月野 琴音	渡部 倫子	JSL 児童を学級担任として受け持つ教師のビリーフとその変容
姫野 光紘	柳澤 浩哉	同性と異性の初対面会話の比較 —話題選択に着目して—

氏名	指導教員	論文題目
鈴木 拓馬	畑佐 由紀子	中国語を母語としない日本語学習者による中国人日本語学習者の発話理解の困難点 —日本語母語話者と比較して—
川原 嘉仁	西村 大志	学級定員問題をめぐる言説の歴史社会学
中瀬 絢香	西村 大志	教育の選別機能再考 —『ドラゴン桜』と『ドラゴン桜2』を通して—
博田 知暉	仁科 陽江	東広島市の多言語環境
新濱 斗亜	西村 大志	「コミュニケーション能力」はどのようにして教育現場で重視されるようになったのか —1990～2020 年の新聞記事に見る—
飯塚 望	西村 大志	文明論の消費のされ方 —梅棹忠夫『文明の生態史観』を中心に—
児島 汐音	永田 良太	方言イメージの形成要因 —広島方言のイメージ調査から—
家頭 みなみ	畑佐 由紀子	外国人児童の学習意欲に関わる要因
高良 沙央	柳澤 浩哉	「ヤクザらしさ」のレトリック —映画「孤狼の血」「孤狼の血 LEVLE2」を事例に—
船木 鷹也	松見 法男	日本語学習者のオンライン授業に対する意識調査
大原 茉鈴	柳澤 浩哉	菅義偉演説の修辞学的分析 —所信表明演説を中心に—
小松 未奈美	仁科 陽江	ドイツ語不定人称代名詞 man について
定家 優佳	柳澤 浩哉	映画『ハーモニー』を読み解く
下之門 彩賀	渡部 倫子	CLIL を通して育成される相互文化的能力 —映像活用授業と記事活用授業の比較を通して—
砂永 拓海	西村 大志	現代における成長の社会学 —『STAND BY ME ドラえもん』を中心に—

執筆者紹介

山下 順子（成蹊学園国際教育センター 常勤講師）

成 利楽（教育学習科学 日本語教育学分野 博士課程後期大学院生）

渡部 倫子（日本語教育学プログラム 教授）

菅川 裕希（比治山大学 非常勤講師）

アイニン・ソフィアワティ（広島大学消費生活協同組合理事会室 留学生担当）

小口 悠紀子（日本語教育学プログラム 准教授）

中山 亜紀子（日本語教育学プログラム 准教授）

第32号 紀要編集委員会

白川 博之・李 在鉉

編集後記

広島大学日本語教育研究第32号をお届けします。

今回目新しいことは、修了生からの投稿論文が一編含まれていることです。投稿規定はだいぶ前から投稿資格に卒業生・修了生が含まれていたのですが、実際に投稿があったのは、初めてかと思います。卒業生・修了生による投稿は、当プログラムの教員による査読を受ける必要がありますが、建設的なコメントをもらって修正することにより、より良い論文にすることができますし、査読付きということで多少付加価値も生じるでしょうから、非常勤講師をやっている業績を増やしたい方、埋もれた修士論文の一部を世に問いたい方、等々、巣立って行ってなお研究に意欲のある方々の投稿をお待ちしています。

それにしても、現教職員・在学生からの投稿が少ないのが淋しい限りです（自分のことは棚に上げて言っています）。レフリー付きの学会誌でないから研究業績としての価値が低い。大した内容でもないのに人目に晒すのは恥ずかしい。執筆を申し込んでおいて結果的には書けなかった場合に面倒だ。投稿をためらう理由はいろいろあるかと思いますが、査読無しの紀要論文であっても優れた論文はたくさんありますし、逆に学会誌論文が面白い論文とは限らないことは我々が経験的に知っていることのはずです。「へボな理屈でも何もないよりはまし」という考え（かつての同僚の先生の名言）もまた研究者にとって大事なことです。自分に宿題を課して自分を追い込むことの効果を考えれば、キャンセルすることで生じる問題など取るに足らないことでしょう。

つまらない論文を印刷してばらまくのは森林資源の無駄遣いだなどという心配も、電子化した発行に変わったことにより、払拭されました。

評価されるためではなく、自分自身の思索の覚え書きのため、くらいのつもりで、取りあえず、手を挙げてくださると、編集者は大変喜びます。

（文責：白川博之）